



岐阜大学機関リポジトリ

Gifu University Institutional Repository

Abdominal pain in patients with resectable
pancreatic cancer with reference to
clinicopathologic findings

メタデータ	言語: eng 出版者: 公開日: 2008-02-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 奥坂, 拓志 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12099/14971

氏名 (本籍) 奥坂拓志 (東京都)
 学位の種類 博士 (医学)
 学位授与番号 乙第 1300 号
 学位授与日付 平成 14 年 3 月 13 日
 学位授与の要件 学位規則第 4 条第 2 項該当
 学位論文題目 Abdominal pain in patients with resectable pancreatic cancer with reference to clinicopathologic findings
 審査委員 (主査) 教授 安田圭吾
 (副査) 教授 清水弘之 教授 石塚達夫

論文内容の要旨

腹痛・背部痛は膵癌患者に最も高頻度にみられる症状の一つであるが、その原因についてはいまだ十分に解明されていない。膵癌切除例において、腹痛・背部痛と臨床病理学的因子との関連を検討した。

研究方法

浸潤性膵管癌に対し膵切除術が行われた95例を対象に、腹痛・背部痛と臨床病理学的因子との関連を検討した。術前の腹痛・背部痛の程度により、対象症例を無疼痛群 (術前に腹痛・背部痛を認めない)、弱疼痛群 (腹痛・背部痛を有するが鎮痛剤の連日投与を必要としない)、強疼痛群 (鎮痛剤の連日投与が必要) に分類した。臨床病理学的因子のうち、病理学的因子は日本膵臓学会膵癌取扱い規約を用いて、腫瘍の占拠部位、腫瘍径、リンパ管侵襲、静脈侵襲、膵内神経浸潤、膵前方被膜への浸潤、膵後面に接する組織への浸潤、膵内胆管への浸潤、十二指腸への浸潤、門脈系静脈壁への浸潤、動脈壁への浸潤、膵外神経叢浸潤、リンパ節転移について検討した。さらに術前の血中アミラーゼ値、尿中アミラーゼ値、血中エラスターゼ1値、血中CRP値についても検討した。また、腹痛・背部痛と生存期間との関連についても検討した。

結果

検討した95例のうち、無疼痛群は55例 (58%)、弱疼痛群は29例 (30%)、強疼痛群は11例 (12%) であった。

【腹痛・背部痛の有無と各因子との関連】

腫瘍径 ($p=0.03$)、膵内神経浸潤 ($p=0.03$)、膵前方被膜への浸潤 ($p=0.048$)、リンパ節転移 ($p=0.0495$) は腹痛・背部痛の有無と有意な関連を示した。

【腹痛・背部痛の程度と各因子との関連】

膵前方被膜への浸潤 ($p=0.02$)、腫瘍径 ($p=0.04$)、リンパ節転移 ($p=0.04$) は腹痛・背部痛の程度と有意な関連を示した。膵内神経浸潤 ($p=0.05$) は腹痛・背部痛の程度と関連する傾向を認めた。

【生存期間との関係】

無疼痛群、弱疼痛群、強疼痛群の50%生存期間はそれぞれ29ヶ月、19ヶ月、9ヶ月であり、無疼痛群の生存期間は強疼痛群に比べ有意に良好であった ($p=0.01$)。

考察

膵臓に生じた腫瘍は、その増大に伴い、膵被膜の伸展、膵周囲臓器の圧迫、脈管・消化管の狭窄など、腹痛・背部痛の原因となりうる様々な病態を引き起こす。膵腫瘍の大きさはこれまでも膵癌の疼痛と関連する重要な因

子であることが報告されており、本研究はそれを支持する結果となった。また、膵前方被膜は大網より連続する腹膜の一部であり、同部位への浸潤は腹膜を覆う体性神経を刺激するため、疼痛を誘発することが考えられる。さらに、膵内神経周囲腔への浸潤は、神経周囲に著明な浮腫を来し、このような変化は、錯感覚・灼熱感を引き起こすとされている。リンパ節転移については、腫瘍径とも有意な相関を示しており、疼痛との関連については慎重に解釈する必要があると考えられた。

一般に膵癌の疼痛は、膵後面の膵外神経叢への浸潤が原因であるとされてきた。しかし、多数例を対象とした病理学的検討においてその点を明らかにした報告はこれまでになく、また本研究においても、膵後面に接する組織や膵外神経叢への浸潤は、疼痛と関連する有意な因子とはならなかった。しかし、神経叢への浸潤がより高度な非切除例においては、同部への浸潤が疼痛の原因である可能性もあり、今後関連を明らかにする必要がある。

強疼痛群の生存期間は無疼痛群に比べ有意に不良であり、腹痛・背部痛は膵癌切除後の予後の予測に有用と考えられる。その予後因子としての真価は、他の予後因子との関連も含めてさらに検討が必要である。

結論

膵癌切除例における腹痛・背部痛は腫瘍径、膵前方被膜への浸潤、膵内神経浸潤と密接な関連を示した。腹痛・背部痛は膵癌切除後の予後の予測に有用である。

論文審査の結果の要旨

申請者 奥坂拓志は、多数例の検討から、膵癌切除例における腹痛・背部痛が腫瘍径、膵前方被膜への浸潤、膵内神経浸潤と密接な関連を有すること、また腹痛・背部痛が膵癌切除後の予後の予測に有用であることを明らかにした。本研究は、膵癌例における腹痛・背部痛の原因についての重要な示唆を与え、また、腹痛・背部痛の程度と予後との関連性を示した点で臨床的にも意義があり、膵癌の病態生理の理解および実地臨床に資するものと認める。

[主論文公表誌]

Abdominal pain in patients with resectable pancreatic cancer with reference to clinicopathologic findings.

Pancreas 2001; 22: 279-284